

平成20年度「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業

モデル事業名	1つの浜松・もう1人の担い手『みさくぼ大好き応援団』の仕組みづくり事業
対象地域	静岡県浜松市天竜区水窪町向島地区ほか(一部、浜松市都市部)
活動概要	<p>①過疎・高齢化で森林環境保全や地域コミュニティの担い手とその支えが減少          浜松市天竜区水窪町は、平成17年に12市町村の合併により人口80万人浜松市の最北端のまちとなった。かつては天竜川や塩の道・秋葉街道などにより人やモノの往来も盛んであったが、平成17年度には町の人口は3,100人でピーク時の3分の1以下に減少し、雇用の場(営林署・銀行・工場)も合理化により続々閉鎖され、若者の流出に拍車がかかり、過疎・高齢化が深刻な状況を迎えている。基幹産業であった林業の衰退・林業従事者の減少で森林管理の担い手が不足し、森林や農地の荒廃化も進み、水源涵養機能が損なわれている。</p> <p>本地区は、町と住民が協働で活性化イベントが数多く開催されてきたが、過疎・高齢化によりこれを継承していく「担い手」が減少している。また、合併・政令市により地元の状況に精通し、活動を支援してきた行政職員の顔が見えなくなり、精神的な支えも失われつつあるため、地域の担い手をサポートする仕組みが求められている。</p> <p>②地域の担い手である住民団体と都市部のNPOとの交流から連携へ、そして連合へ展開          水窪町の住民団体「ここほれワンワン塾(以下、ワンワン塾という)」は、まちづくりの担い手育成を目的に平成7年に発足し、交流活性化イベント「日本一ヤマメつかみ取り大会」などを行い、住民からも評価されている。</p> <p>旧水窪町が向島地区町有林「イロウ園地」を利用して散策路など公園(として整備(10haのうち2ha)したが、町では管理できず、ワンワン塾が無償で賃借し、通称ワンワン公園として住民が山の管理・活用を行ってきた。しかし、市町村合併によって維持管理のための予算もゼロになり、公園(山)の管理の新たな仕組みづくりが求められてきた。</p> <p>この10年間、都市側のNPO法人魅惑的倶楽部と環境保全啓発を通じた人的な交流も継続的に行ってきた。それらの団体も限られたメンバーでの交流になりつつあり、新たなステップへの展開を模索している。</p> <p>このようなことから、政令指定都市「浜松市」の小さな過疎のまちにおいて、地域の住民だけではなく、下流域の都市住民の幅広い参加による新たな担い手と資金(応援団)の掘り起こしを行い、地域交流イベントの運営や自然環境の保全・啓発・活用事業を継続していくための仕組みづくりを目指す。</p>
今年度の主な取組	<p>以下の①～③の取り組み(試行)を基に、ワンワン塾と浜松市都市部のNPOや多様な市民との交流を通じて「みさくぼ大好き応援団」(人と資金のサポート)制度を研究し、都市部の担い手としてサポート連携や交流のシステムを構築する。</p> <p>①みさくぼ大好き応援団の人材発掘と仕組み研究          今まで水源地域(水窪)と交流してきた団体・企業の中から交流を求める人材の発掘を行う。また、みさくぼ大好き応援団(サポーター)の仕組みを研究するため、人材(モニター候補者)を集め仕組みづくりのワークショップ形式の会議を開催する。</p> <p>みさくぼ大好き応援団の取組を紹介するため、NPOのサイト内にホームページを開設する。</p> <p>②イロウ園地(市有林)の管理・活用を通じた交流の仕組みづくり          水窪町向島地区の市有林・イロウ園地の管理を支える「応援団」の仕組みとして、イロウ園地の里親制度となり、遊びと学びの環境体験学習プログラムを都市住民に提供し、首都圏及び天竜川下流域(都市部)の住民を対象に愛好者や担い手を掘り起こす「みさくぼ環境学習セミナー」を企画・試行する。道中は「天竜川・水窪自然まるごと探訪モニターツアー」としてガイド付の川と緑の環境学習も行う。</p> <p>③森林環境保全の啓発活動「竜水護森木札」の持続・展開策の試行          森林環境保全を訴える市民啓発活動として、イロウ園地(市有林)の間伐材を利用し、市内の障害者授産所に木札(一種の絵馬)を制作してもらい、1枚300円のチャリティを募り、天竜川の水を護る森に感謝して「願い事」を書き、水源の山住神社に奉納する水と緑の啓発活動「竜水護森木札」を平成13年からNPOの自主事業として実施。</p> <p>これをより多くの都市住民に訴えるための普及策として、浜松市内の商店の店頭や事業所でチャリティを扱う「取扱協力店」の開拓とネットワーク化を図る。また、活動のPR・啓発のためのパンフレット、簡易看板、のぼり旗等の備品を制作し、広く市民に普及させる。</p> <p>※チャリティの収益は、すべて浜松市環境基金と木札の制作費、神社への奉納費に充てる。</p>

活動結果	<p>①関係者の意識変化 水窪町のここほれワンワン塾は、住民が地域活性化のために活動するまちおこしグループであり、当初は自分たちが満足する活動を趣味やボランティアで行うことを心掛けており、不特定多数の都市住民との交流は望んでいなかった。しかし、経済不況により仕事(収入)の減少や市政方針の転換及び行政改革により活動の「自立化」が求められ、都市との交流を通じ、活動費を捻出するため手段として活動費を自ら稼ぐ仕組みを追求していこうという意識に変わってきた。意識が芽生えてきた。これはワンワン塾だけでなく、この取り組みを広めていくためには都市側のNPOなども同じ状況にあり、「自ら稼ぐ」意識を持つようになってきた。</p> <p>②事業の話題性を高め、意義ある活動のPR強化 地球環境や流域の水環境の保全だけでなく、福祉活動の支援など意義のある活動をより多くの人に訴えかけ、賛同者を増やしていくためには、常に話題性のある取り組みが必要である。 具体的には、木札(絵馬)のサクセスストーリーを探し、木札に協力する人にもメリットを与える仕組みを掘り下げていくことが重要である。</p> <p>③森林資源等を活用した商品開発・販売の仕組み 森林の維持管理活動を持続するためには、活動資金を捻出することが急務となり、木札以外の資金源を確保する必要がある。間伐材など森林資源や特産品等を活用した新しいエコ感覚の商品開発やその販売の仕組みを研究・試行していくことが求められる。そのためには、都市住民が求めるデザインなどの研究が必須となる。特に、環境に意識の高い大都市圏へのPRなども視野にいれておく必要がある。</p> <p>④より広域的な連携活動 21年2月の「三遠南信サミットin遠州」開催を機に天竜川や秋葉街道を軸に上下流・南北の市民協働の「プラットホーム(遠州市民プラットホーム)」を立ち上げた。地域づくりサポートネットが事務局であり、魅惑的倶楽部は世話人を務めている。ここほれワンワン塾も構成団体となっている。 また、南信州側の市民団体からも連携の申し入れが出てきた。したがって、県境を越えて「流域」を意識してより多様な主体との交流・連携が期待される。</p>
当初予想していなかった効果	<p>○みさくぼ大好き推進協議会の構成団体であるNPO法人魅惑的倶楽部の副理事長が本活動とは別で環境省のあなたにに使ってもらいたいマイバックのコンテストにおいて、間伐材を利用したエコバックのデザイン部門で環境大臣の最優秀賞を受賞した。</p> <p>○今までまちづくり団体(ワンワン塾)は、行政の支援を受け、「ヤマメのつかみ取り大会(イベント)」の運営を担い、山村の地域おこしの役割を果たしていた。この委託費が彼らの活動費の原資となっていた。しかし、合併や行政改革などにより、今までどうりの委託が認められず、活動費が大幅に減少することになった。さらに、経済危機の影響で生活の基盤であった本業も厳しい状態となり、単にボランティアだけでは活動できなくなるという危機感も抱き始めた。そのような中で持続的で自立した活動が求められ、森林資源を活かすコミュニティビジネスなどにより自ら活動費を稼ぎ出す意識が強まった。</p>
実施状況(写真)	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>▲モニターツアーの様子</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>▲WSの開催</p> </div> </div>
応募団体名	NPO法人魅惑的倶楽部、ここほれワンワン塾、NPO法人地域づくりサポートネット
リンク	<a href="http://www.exotic-club.jp/">http://www.exotic-club.jp/</a>
部局/担当者名	副代表理事 山内 秀彦
連絡先	浜松市中区板屋町527番地(静岡不動産ビル3階)(053)455-0220 info@shizuoka-t.net
推薦市町村名	静岡県浜松市